



三島企業の考える 三島カルチャー

1



加和太建設株式会社 代表取締役 河田 亮一 氏

プロフィール

1977年三島市生まれ。三島市立中郷中学校卒業後、留学。高校時代をアメリカ、スイスで過ごす。一橋大学経済学部卒業後、(株)リクルート、(株)三井住友銀行を経て2007年加和太建設に入社。2015年10月より現職。

「初めて」が地元になれば、 きつと故郷が好きになる

三島市に本社を置く地方ゼネコンの加和太建設は、近年、複合商業施設「大社の杜みしま」の企画運営や、ネット新聞「伊豆経済新聞」など、建設業にとどまらない多彩な事業展開で、地域への存在感を大きくしている。その仕掛け人で、2015年10月に社長に就任したばかりの河田社長に話を伺った。

―業務内容を教えてください―

土木・建築・不動産を主として、それに関連する、と自分たちで定義している事業領域をいくつか広げながら展開しています。

建設業の魅力を伝えるための3つの再定義

2011年に、「地方ゼネコン」が、地域において担う役割とは何かということを考えてきました。災害時には復興支援に率先して駆け出したり、大雨洪水警報が出れば河川パトロールをするなど、見えないところで活躍するということはありますが、「受けの姿勢」だと、いつまでたっても自分たちの仕事の魅力を発信できません。攻める姿勢、自分たちがこの地域にいるというところが、まちにとって重要であるというポジ

ショニングをきちんと築かないと、建設業は不人気職種のままです。そのために地域で取り組むべき3つの領域を定義をしました。「人が住みたいと思う住空間の提供」ここに住んでいる人たちが、日常的に行きたいと思える場所の創造」そして「教育」です。この地で子供も大人も成長していけるようにすることが、地域の元気に繋がっていくと考えています。

―大社の杜や伊豆経済新聞の取り組みは、三島の文化の発展にも大きな役割を担っていると感じています。文化という視点はどうお考えですか？

3つの領域での取り組みを考えていた時に、たまたまお声がけいただいたのが、現在大社の杜のある、三嶋大社の門前町の土地の活用方法です。この地にどういう開発をするか、人が来なくなるのか、街が活性化することにつながるのかを考えました。

もともと大社の門前町は、東海道と下田街道と甲州街道が交差する地点にあり、人が行き交っていたことにより、新たな商売や文化、情報が発信されていたところだったはず。しかし、人の流れが変わってそれが失われてしまった場所です。

これは文化の現場でないと起きない問題なのだろうが、それを映画づくりを通じて知れたことはよかったと思います。

―今後の加和太建設が目指すビジョンについて教えてください。

「地方ゼネコン」の再定義をしたいと思っています。iPhoneの登場によって携帯電話の定義が全く変わったように、地方ゼネコンが地域を活性化していく業種の代名詞となるようにしたいです。地域活性化のために建物を作ったり、施設を運営したり、メディア展開したり、文化を支援したりするのが地方ゼネコンだよね、と言われるようになったら、絶対日本は良くなると思っています。存在意義を伝え、地域の課題を解決することは、やっていかなければならないこと、そうあるべきだと思っています。

「思い」を伝えて広げる

大社の杜は戦略的にマスコミに売り出しをしました。最初は私自身について、次いで店舗の商品について取り上げていただきました。しかし、大社の杜は新規出店新しい販売方法、新しい事業領域への参入のいずれかが出店の条件であったので、もっと出店店舗のチャレンジを取り上げてもらいたいと強く感じていました。

そんなもどかしい思いをしていた時に、ハッピーニュースが取り上げない「みんなの経済新聞ネットワーク」に出会いました。商品の裏にあるストーリーを自分たちから発信することで、地域でがんばる人たちにもっとスポットライトが当たって欲しいと思い「伊豆経済新聞」が始まりました。

今後は、よりこの地域を元気にするために、とにかくと繋げるために、がんばっている人同士がリアルな場で接点を持つ機会を作ることで、横のつながりや、お互いを刺激しあうようなきっかけにしていきたいと考えています。

―三島の環境や文化についてどのようにお考えですか？



大社の杜みしま

美しい川や蛸が見られる場所が、三島にしかないわけではないですね。大事なのは、「人生で初めて経験したことが、自分の地元にある」ということだと思います。大社の杜もそれを強く意識してイベントを企画しています。

例えば、自分の蛸の思い出は、母方の実家があった富山の風景ですが、今の三島の子供たちは、6月になれば楽寿園や源兵衛川沿いで蛸を見ている。その光景は一生忘れないでしょう。そして、大人になったらきっと自分の好きな街として語るでしょう。環境の素晴らしい街というよりは、「初めて」を地元で経験できる状態を多く生み出すためにも、文化が重要なのではないかと思います。そういう意味では、最近市内で子供向けや季節のイベントが増えてるのは素晴らしいことですね。そして、そのことをイベントを企画する側が意識していくことが

―個人として関心を持たれている文化・芸術の分野はありますか？

映画「みしまびと」の制作に参加しました。映画づくりに関わる目的って、本当に人それぞれなんです。企業経営者の集まりでは、異業種交流などの目的を持つながらもまちづくりに協力すると思うのですが、映画づくりは全然違いました。単純に友達を作りたいとか、映画が好きだとか、役者に会いたいとか、人から感謝されたいとか、空いている時間を使いたいとか、本当にいろいろな人が集まっている、それぞれの事情もあるし、関わり方のモチベーションも違いました。

人それぞれを認めて 共に楽しむ場作り

しかし、それは物事の本質なのでしょう。給料をもらうから仕事をするのが当たり前前なのではなく、それぞれバラバラの事情で集まっても、楽しい場というのはどんな人でも楽しいのです。ですが、その時にどんなメッセージを伝えるのかは見失わないようにしなければいけません。



加和太建設株式会社
静岡県三島市文教町1丁目5-15
http://www.kawata.org

三島企業の考える三島カルチャーは、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業の方々、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等。詳しくは下記のwebサイトをご覧ください。

次回＝大岡信ことば館（Z会館）館長 岩本圭司氏